

主 題：みことばへの情熱

聖書箇所：ローマ人への手紙 12章1－2節

(近藤牧師より) 今日のメッセージはマスターズ大学聖書学部長のトム・ホルステッド博士です。私はつい最近までお会いしたことがありませんでした。というのは、神学校と大学の場所は離れているので大学に行くことはなかったのですが、行ってみて分かったことは、この先生が聖書学の責任者であるということもあって、教え子たちがいろいろなところでいろいろな神のわざをなしているということです。この浜寺にも先生から教えを受けた人たちがたくさんいます。教え子たちがこのように世界中で主のご用に役立っていることを見るのは先生冥利につきますねと申し上げますと、先生は「私はそのことを神にどれほど感謝してもしきれない」とおっしゃっていました。どうしてもここに来て教え子たちがどんな働きをしているのか、そのことを見たいとインドからの帰り大阪経由で浜寺行きを予定に組み込んでくださったのです。私たちは心から先生を歓迎し、先生を通して語られる主のみことばを期待して待ちたいと思います。

皆さんといっしょにここにこうしていることができるのは大きな特権です。今、近藤先生が言ってくださったように、私の教え子たちがここで、また世界のいろいろなところで神のために仕えている、そのことを見ることは本当に素晴らしいことです。これは神の恵みのゆえに起こること、それ以外にありません。ですから、神の行なっているすべてのことのゆえに、神に栄光があることを何よりも望みます。今日、皆さんといっしょにローマ人への手紙12章を見て行きたいと思います。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

ローマ12章に来るにあたって、ここでこの書の中での大きな分かれ目にぶつかります。11章までパウロは教理について教えました。パウロはこの手紙を始めるにあたって、あいさつをし、そして、これからの計画について手紙を書きました。そして、この書の中心的教えである「恵みによる義認」を書いたあと、パウロは非常に多くの教理的な教えを書き始めたのです。この教理を書き始めるにあたって、パウロは私たちの堕落ということを記しました。3章の中でパウロは私たち人間がもっている堕落という問題を書き、その後、私たちがそこからどのような救われるのかということを書くのです。そこでパウロがしっかり明確に記すことは、私たちの行ないによってその堕落から救われるのではなく、神の恵みを通して働く信仰によってのみ救われるのだということを書いたのです。それこそが私たちがいう「信仰による義認」なのです。そして、この「信仰による義認」ということをより明確に定義しそれを説明するのが4－5章で、そのあとにパウロは聖化について話し始めます。5－8章にかけて、パウロは実践的なきよさ、聖化の過程について話し始めます。そして、9－11章でこれまでに書いたことはすべて、ユダヤ人と関わりがあることを教えます。それゆえに、1－11章はほとんど教理的な内容といっても構わないでしょう。教理的な部分を終えたあと、この12章からパウロは実践的な事柄について話し始めるのです。

そこでパウロは12章をこのように始めます。**「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。」**と、この「神のあわれみ」とは1－11章までのすべてのことを指します。なぜなら、「そういうわけですから」ということばを使って、1－11章までに書かれたその内容のゆえにと言います。そして、彼はあなたに「どうかそれをしてください、お願いですから」と言って懇願するのです。パウロはここで命令を与えているわけではありません。主にある兄弟としてお願いをしているのです。そのお願いは、兄弟たちが自分のからだを生けるいけにえとして主にささげてほしいというものでした。ここで使われている「ささげる」という概念は、旧約聖書の中であつたものと全く同じものです。いけにえを横たわらせて主の前にささげるというその姿です。つまりそれは、私たち自身をだれか他の人が自由に使うことができるように、私たちを横たわらせる、そのようなことです。別の言い方をするなら、神の祭壇の上に私たちを置いて、神の望むままに私たちを使っていただきたいとそういう態度をもって、そこに現われることです。私たちが**「生きた供え物としてささげなさい」**と命じられるとき、それは私たち自身が死になさいと言っているのではなく、むしろ、聖い供え物となりなさいと言われているのです。それが神の前に喜ばれる唯一のささげものであるからです。パウロは1－11章までに書いたすべてのことを通して、神のあわれみのゆえに私たちがが自らを聖く、生きた供え物とし

て神の前にささげることを求めているのです。

今日、私たちの前にある一つの大きなチャレンジというのは、私たちクリスチャンとしての人生を送って行こうと願うそのことです。人々はどうもそのことに対して、常に失敗し続けているように見えます。人々はそのことに関していくつかの方法を取って、何とかそれを改善しようとしします。聖書研究会に行ったり、聖書を読んだり、祈ったり…。けれども、どうもそれらは機能していないように見えます。その理由は、彼らが自分たちの人生から何かを自分に受けたいという態度をもってそれをするからであって、自分のうちにあるものを主のためにささげたいという願いからそれを行なっていないからだと思ふのです。皆さんによく分かっていたいただきたいことは、クリスチャンの生涯における非常に大きな成功のカギというのは、私たちが何かを受けることではなくて、私たちが与えるところにあるのです。キリストが私たちに求めることは、キリストのうちにあるものを私たちがもっともっと得ることではなくて、神がもうすでに与えてくださったものを私たちが人々に与えるところにあるのです。ここで私たちに求められていることは、私たちの人生をいけにえとしてささげるということです。つまり、私たちは与えることを求められているのです。ここで、私が確信していることは、この与えるという行為は神の前に為すことができるもっともすばらしい礼拝であるということです。これこそがクリスチャンの生涯の目標です。私たちは神の前に霊的な礼拝をささげることをするようにと、そのように召されているのです。このいけにえは私たち自身です。

パウロは1-11章に記したすべての神のあわれみを与えられているゆえに、自分たち自身を神の前に豊かにささげて行きなさいと言います。11章までに記されている神が為してくださったことすべてを考えたとき、この自らを神の前にささげる、自分を与えるということは、唯一私たちが考えることができる正しいもっともふさわしい対応なのです。私たちがそれをするのは、私たちがそれをしなかったなら神は私たちに何か悪いことを与えるからと、そういうことを思うからそれをしようとするのではありません。私たちがするしないによって神は対応されたりはしません。神のあわれみがすばらしいゆえに、私たちは心からの感謝をもってそれをしたいと願うからです。もし私たちがそれをせずに、自らを与えることを拒むとするなら、それはものすごく大きな神に対する感謝の欠如です。皆さんにとって、最も大きな心の中の願望とはいったい何でしょう？神の栄誉と栄光のために自分自身をささげるということこそが、皆さんの最も大きな最も強い願望であるべきなのです。なぜなら、このようにいけにえは永遠に続くいけにえだからです。そして、この概念こそが本当の霊的な礼拝を構成するものです。これこそが唯一神に受け入れられるささげものです。

ルーフックという非常にすばらしい中国人のクリスチャンがいます。彼が自分の仲間たちが南アフリカに奴隷として連れて行かれたときに、彼の心は非常に大きく揺れ動きました。それゆえに、彼は自分自身も奴隷となって南アフリカに行ったのです。そして、彼が死んだそのとき、その南アフリカには、200人以上のクリスチャンたちがそこにいるようになったと言います。この人はまさにこの12:1に書かれていることを実践した、私たちの模範であります。

☆私たちはどのようにして生きたいいけにえをささげるようになって行くことができるのでしょうか？

2節にそのことが教えられています。そこでは「この世と調子を合わせてはいけません。……心の一新によって自分を変えなさい。」と教えられています。これは私たちが毎日つねに行なっていかなければいけない事柄です。「調子を合わせることも」「自分を変えること」もどちらも現在形で記されています。つまり、これは常に私たちの生活の中で、私たちが死ぬそのときまで行なわれ続けるものです。そして、クリスチャンであるなら、私たちはよりこの世と調子を合わせないようになり、私たちの心が一新されることによって、神の方へと変えられ続けるものです。私たちは完全にこの世から切り離され、キリストに似た者になることは、私たちが天に行くそのときまではありません。けれども、その経過というのは私たちの生涯の中で見られなければならないのです。私たちはもっともっとキリストに似た者へと近づいていかなければなりません。いったいこの「調子を合わせない」とはどういうことなのでしょう？これは、自分の内側にある、つまり、クリスチャンであるというその事柄とはそぐわない外側の様々な事柄を行なっている、その外側の姿を指しているのです。キリストとともに歩むその歩みを妨げる様々なこの世の事柄、習慣であったり、状況、考え方、そういうことを止めなさいということを言っているのです。なぜなら、それらの事柄は私たちがキリストの内にある、クリスチャンであるということをしつかりと反映しないからです。私たちは神がいけないかのように、また、一時的な様々な事柄に捉われてしまっているのです。皆さんは、この世のパターンに沿った様々な考え方や態度、行動というのをどのように取っておられるでしょう？どれほどそれが皆さんの生涯の中にあるのでしょうか？思い出してください。私たちは決してこの世から切り離されることは今ありません。けれども、私たちはキリストの方へ向かって進んで行っていないといけないのです。私たちはこの世と調子を合わせているのではなくて、私たちの心が一新されることによって、変えられ続けていなければならないのです。この変

化というのは私たちがキリスト者であるというその内側の事実に沿った、外側の様々な行動、態度、考え方というのがそこに現われて行く、その変化です。ここで使われているギリシャ語のことばは、幼虫が成虫になるその変化、変態というそのことばが使われています。

この同じことばがマタイの福音書17章で何度か使われているのを見ることができます。17：1－2に「それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。：2そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。」とあります。ここで使われていた「御姿が変わり」ということばが12：2の「自分を変えなさい」と同じことばだったのです。イエスは弟子たちに対して、そこで、イエス・キリストがいったいどのような方であるのか、その内側の事実というのを、そのほんの一部を弟子たちにその場で、外側において示されたのです。Ⅱコリント3：18で「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」とパウロは言っています。私たちがキリスト者として他の人々の前を歩いて行こうとするなら、私たちが変えられて行くときに、それは私たちの内側にあるそのキリスト者としての事実が、外側にしっかりと反映して行くようになって行きます。この世が私たちをこの世のパターンに沿った、その型にはめて行こうとするのと同じように、私たちのクリスチャンであるというその事実は、私たちがキリストへ似た者へと変わって行く、心の一新によってそれが行なわれて行くようになって行く、それがキリスト者の生涯なのです。別の言い方をすれば、皆さんは私たちが自分自身を変えて行くために、外側を変えて行くことから始めるのではなくて、私たちの心、私たちの思いを変えて行くことから始めなければいけないのです。これこそがまさに聖化のカギであります。ここに書かれていることに気付いてください。きよくなって行く、その聖化をして行くために私たちは何をしなければならないのかということ、心を一新することだと言います。

☆いったいどのようにして私たちの心を一新するのでしょうか？

それは唯一の方法しかありません。みことばです。Ⅱテモテ3：16－17に「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。：17それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と記されています。また、Ⅱテモテ2：15には「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることの無い働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」と記されています。このみことばによる心の一新というのは、私たち自身をどのように捉えるか、それが変わって行くだけではないのです。私たちは自分自身が神の恵みによって変えられた者であるということを知って行きます。そして、他の人々が自分が対応されたいと思うように、相手に対して対応したいと願うようになって行くのです。そして、私たちの生涯というものが継続するものではなく、一時的なものであるということを知って、そのように見つめるようになります。いったいどのようにして、私たちはこの心の一新という分野において成長していることがわかるのでしょうか？いったいどのようにして教会が変化ということにおいて成長していることがわかるのでしょうか？ご自身、これから挙げる四つの質問をして見てください。

- (1) 私は1年前よりも今のほうがもっと神を愛しているだろうか？
- (2) 私は1年前よりも私は神のみことばをより愛しているだろうか？
- (3) 私は1年前よりも他の人をより愛しているだろうか？
- (4) 私は1年前よりも自分の罪をより憎んでいるだろうか？

覚えてください。変化というものは段階を経て行なわれて行くものです。もし、皆さんが今した質問の答えが「はい」というものであるなら、皆さんはそのような段階を経ています。けれども、この箇所ですべてに言われているのは、私たちが心の一新というのを「みことばによってなす」ということです。なぜなら、このみことばを通して私たちは神をより愛し、他の人をより愛し、罪をより憎む者になって行くからです。

皆さんは新約聖書に260の章があることをご存じでしょうか？もし一日に3章ずつ読むとするなら、3ヶ月で読み終えることができます。皆さんが今日この日から新約聖書を毎日3章ずつ読むという目標を立てられたならどうでしょうか？そうすれば自分の心、思いが変化し始めると思うのでしょうか？3ヶ月終わった後に、もう一度最初から3ヶ月間かけて読み続けようと思われたなら、どうでしょうか？また、その次の3ヶ月、その次の3ヶ月と続いていったらどうでしょうか？1年かけて4回読み通すことができて、しかもまだ、数日余るようになります。そうすると、皆さんは神が皆さんの内側に心の変化というそのプロセスを始められていると思うのでしょうか？その通りだと私は思います。なぜなら、神はここで「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知る」と言うからです。私たちが神のもっている何が良いことで、何が受け入れられるのか、何が完全であるのかを私たちが知り始めるようになるからです。この一新された心、思いというのは、従順な意志によ

って表現されて行きます。そして、神の前にささげられている私たちのからだということによっても表現されて行きます。

私たちクリスチャンとしての行いの目標とはなにでしょう？それは、他の人たちを喜ばせること、確かにそれも良いことでしょう。それは単に私たちが人々の模範となることではありません。確かにそれも良いことかもしれません。けれども、究極的な目標、なぜ私たちがこの世で正しく生きて行くべきなのかというその理由は、それが神が喜ばれることだからです。ここで言われていることは、神のみこころというのは良くて、神に受け入れられて、完全であるということです。ローマ8：28に記されているように「**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。**」、神がすべてのことを働かせて益としてくださると言います。ロイド・ジョーンズ博士は「神に受け入れられることを私たちが行なっていくとき、私たちクリスチャンは神のみこころというものをだんだんと好むようになって行く」と言っています。Iヨハネ5：3では「**神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。**」とあります。私たちは神のみことばによって私たちの心を一新して行かなければなりません。それによって、神のみこころがすばらしいものであり、それが私たちの益になるものであることを証明して行くのです。私たちは神のみこころを愛し、みこころが実践されることを何よりも願い、それを喜んで行くのです。そして、最後に、

☆心を一新するというのは、神のみこころが完全であることを知ること

私たちの心が一新されて行くとき、私たちは神が行なうあらゆることが完全であることを確信して行くのです。私といっしょにインドに行ったチームは、1ヶ月家から離れています。この1ヶ月、私たちがアメリカから離れている間に、私の同僚の教師のお嬢さんが交通事故で亡くなりました。私たちのチームのメンバーの一人は、この旅の途中でアメリカに戻らなければなりませんでした。なぜなら、彼が婚約しようとしていたその女性が交通事故で亡くなったからです。また、いっしょに旅をしたチームの女性の一人もアメリカに戻らなければなりませんでした。彼女の親友がまた交通事故で亡くなったからです。その中で、私たちは疑うかけらももたずに、神が為すことはどんなことでも完全であると確信をもって言うことができるでしょうか？そして、私たちは神のみこころに対して服従します、従順でありますというその決意において、安息を得ることができるでしょうか？私たちはみことばを通して心を一新することによってのみ、その確信に立つことができるのです。より私たちが変えられ、どんどん調子を合わせることがなくなっていくときに、それは行なわれるのです。私たち自身をいけにえの祭壇の上に置いたときに…。皆さんはそれをしたいと願っておられますか？